

フランス語を知る、ことばを考える—語彙の諸相—

ヨーロッパ学科フランス語圏専攻 石野 好一

現代のフランス語はどんな言語だろうか。『ことばの世界 第2号』においては、音や語形、読み方、文構造などを取り上げ、さらにフランス語の論理性について考察することで、フランス語らしさの一端を垣間見た(石野, 2010)。本論では、語彙の面から、フランス語の特質について考えてみたい。

1. フランス語の語彙数

1.1. フランス語は語彙数が少ない

フランス語は英語に比べると、語彙が少ないと言われる。実際、小型の仏和辞典などの見出し語は5万語前後、中型の辞書でも10万語に満たない。(以下の辞典の語彙数はいずれも概数。)

『ディコ仏和辞典』(白水社)	3万5千語
『プログレッシブ仏和辞典』(小学館)	3万5千語
『プチ・ロワイヤル仏和辞典』第4版(旺文社)(以下、『プチ』)	4万3千語
『クラウン仏和辞典』第6版(三省堂)(以下、『クラ』)	4万7千語
『新スタンダード仏和辞典』(大修館書店)	6万5千語
『ロワイヤル仏和中辞典』第2版(旺文社)(以下、『ロワ』)	9万語

大型の辞典でも次のようである。

『仏和大辞典』(白水社)	8万2千語
『小学館ロベール仏和大辞典』(小学館)	12万語

フランスで出版された大辞典でも意外に少ない。

<i>Grand Robert</i> (6巻, 2001年, CD版2005年)(以下, GR)	10万語
<i>Trésor de la langue française</i> (16巻+補遺1巻, 1971-1994年)	10万語

それに対し、『ジーニアス英和大辞典』(大修館書店)が25万5千語、*Random House Webster's College Dictionary* (Random House)が31万5千語、*Oxford English Dictionary*(= *OED*. 1989年第2版, 全20巻)の主要な見出し語数が29万語という。

なお *OED* については、小見出し語やその他の項目を含めると60万語になるという(Wikipediaによる)。

また英語の単語は2009年に100万語に達し、最近では約100分に1語のペースで新しい言葉が生まれているという調査もある。(朝日新聞2012年2月9日付)

ちなみに日本語の語彙数も辞典データではフランス語よりも多く、『広辞苑 第六版』(岩波書店, 2008年)が24万項目、『日本国語大辞典第二版』(全14巻, 小学館, 2000~2002年)が50万項目となっている。

ただし、フランス語に物の名前が少ないというわけではない。*Grand Larousse encyclopédique*(『ラルース大百科』10巻)の見出しは20万という(ミッテラン, 1984, p.13)。

1.2. フランス語の語彙数が少ない理由

フランス語の語彙が少ない理由としては、いくつか考えられる。

歴史的には、音韻変化が著しかったフランス語では、中間音が消え、語末音が消え、1音節語などの短い語が増え、同音異義語が多くなった。同音異義語の中には語の混同が生じた結果、淘汰されてしまうものが出たことが想像できる。

一例として、南仏語の *gat* (「猫」と *gal* (「鶏」) の例がある。どちらも *gat* となった結果、「鶏」の方が消えた。(島岡茂, 1982, pp.62-63)

またフランス語は、その成立期は別として、近現代において、外来語をあまり受け入れなかった。新しいものが外国から入ってきた場合、従来のフランス語を用いて表す。新しい製品や発明品ができた場合も、既存の単語の組み合わせによって命名することが多い。

例えば、様々なタイプの「かばん」をフランス語では *sac* に説明を追加することで表す。

フランス語	英語	日本語
<i>sac à main</i> (手カバン)	<i>handbag</i>	ハンドバッグ
<i>sac à dos</i> (背カバン)	<i>rucksack, knapsack</i>	リュックサック
<i>sac banana</i> (バナナカバン)	<i>pouch</i>	(ウェスト)ポーチ

それに対して、英語ではそれぞれ別の語が作られている。日本語はいずれも外来語である。同様に、「部屋」を表す語には、次のような対応が見られる。

<i>salle à manger</i> (食事用部屋)	<i>dining room</i> [<i>hall</i>]	食堂, ダイニング
<i>salle de bains</i> (入浴部屋)	<i>bathroom</i>	浴室, バス
<i>salle de classe</i> (授業部屋)	<i>schoolroom, classroom</i>	教室
<i>salle de séjour</i> (滞在部屋)	<i>living room</i>	居間, リビング
<i>salle de jeu(x)</i> (遊戯部屋)	<i>playroom, gaming room</i>	遊戯室, ゲーム場

機器の名前はどうか。

<i>appareil photo</i> (写真機器)	<i>camera</i>	カメラ
<i>machine à écrire</i> (書記用機械)	<i>typewriter</i>	タイプライター
<i>machine à laver la vaisselle</i> (食器を洗うための機械)	<i>dishwasher</i>	食器洗い(機)

machine à voyager dans le temps¹ *time machine* タイムマシン
(時を旅するための機械)

このように、フランス語は目的や用途を後に付すことで様々な道具や機器を表そうとする。これにより、新たに語を作る必要がない。語彙数は増えにくくなる。また修飾語は後につけるため、辞書の見出しは一つにまとまり、増えない。

それに対し、英語や日本語では、既存の語を使うにしてもそれを合成して新しい語を作ったりする。外来語にあまり拒否反応を示さず、むしろ積極的に取り入れる。そのため、辞書の語彙項目は増えることになる。

また英語の語彙数が多い別の理由として、フランス語からの借用語が多いことが指摘されている(佐久間, 1996)。その結果、英語には、*aid* と *help* のように、しばしば同じものを表わす 2 つ以上の語が存在する。

日本語でも外来語を示すカタカナ語の多さはしばしば問題になっているが、中国語からの借用である漢語の多さはもはや問題にもなっていない。

また日本語では、漢字を組み合わせることによって、二字熟語、四字熟語がどんどん生産される。この漢字の造語力も新語を作る原動力となっている。そのため、日本語も語彙数の多い言語になっている。

しかしながら、上の例からもわかるように、語彙数が少ないことは必ずしも表現力が低いことを表すわけではない。語の組み合わせによって、さまざまなものや概念を表すことができる。

またフランス語には多義語が多い。一語が複数の意味をもつ。したがって、少ない語彙でも多くの概念を表すことができる。実際、上で挙げた *Trésor de la langue française* の見出し語は 10 万ほどだが、そこに含まれる定義(意味)は 27 万となっている。

1.3.使用頻度とテキスト理解

多義語が多く、少数の語で多くの概念を表すことができるフランス語では、使用頻度の高い上位 1000 語が日常語の 80.5% を占めるという。それに対し、日本語では 60.5% にしかならない(宮島他編, 1982, p.41)。また、フランス語では 5000 語あれば日常のテキストの 90% をまかなうことができるのに対し、日本語は約 1 万語ないとできないという(北原, 1982, p.43)。

さらに、ヴァンダー・ベーク Vander Beke の基本語彙一覧表をもとにピエール・ギロー Pierre Guiraud が算出したデータによると、最初の 100 語がテキストの語全体の 60% を占め、4000 語では 97.5% をカバーできるという(ミッテラン, 1984, p.17)。

別の調査でも、1000 語のカバー率が 83.5%、2000 語で 89.4%、3000 語で 92.8%、4000 語で 94.7%、5000 語では 96.0% となり、これは英語、スペイン語、中国語、日本語と比較しても最も数値が高い。(沖森卓也ほか, 2006, p.82)。

同じ語をさまざまな意味で何度も用いるために、同じ語の出現回数が多くなるわけである。単純に考えれば、フランス語の方が少ない労力で楽に理解が得られるということになるかもしれない。しかし、それだけ上位語の多彩な意味や用法を知らないといけないことになり、単純にフランス語の方が簡単であるとは言えない。

¹ *Dictionnaire Anglais-Français Larousse.*

それでもなお、少数の高頻度の語彙を押さえることが効率よくテキスト理解力を向上させるために重要であるということは否定できないだろう。

2. 使用頻度

ではどういう語が使用頻度が高いのだろうか。これはどういうコーパスをもとにしているかによって異なることが考えられる。

上で挙げたヴァンダー・ベークの語彙表は、19世紀末および20世紀初頭の文学、ジャーナリズム・科学の散文をコーパスとしており、書き言葉中心であり、データとしては古い。

比較的新しいものとして、まず話し言葉を中心にしたグーゲネームの『基礎フランス語』と、文学データベースをもとにしたブリュネの頻度表を比較してみよう。

2.1. グーゲネーム『基礎フランス語』

話し言葉をコーパスの中心にしたものとしては、グーゲネーム Georges Gougenheim の『基礎フランス語』*Dictionnaire fondamental* (1958) (3000語) が知られている。またそのもとになったデータは、彼とその共同研究者たちによって再編集され、*L'élaboration du français élémentaire* (1964) というデータベースになった。これは「地理的・社会的にきわめて多種多様な出身階層の証人たちとの会話を録音した163のテキストによる」312135語の採取調査から、上位7995語を取り出したものである。(同上)

ミッテランによると、その上位 50 語は次のようになっている。

『基礎フランス語』上位 50 語:

être, avoir, de, je, il(s), ce (代名詞), la (冠詞), pas (否定), à, et, le (冠詞), on, vous, un (冠詞), ça, les (冠詞), que (接続詞), ne, faire, qui (関係代名詞), oui, alors, une (冠詞), mais, des (不定冠詞), elle(s), en (前置詞), dire, y, pour, dans, me, se, aller, bien (副詞), du, tu, en (副詞的代名詞), au, là, l' (冠詞 le), comme, voir, non, savoir, nous, puis, ah, l' (冠詞 la), oh.

※動詞 être の形は(312000の生起例に対して)14083回、ohは1258回現われている。

—ミッテラン1984『フランス語の語彙』p.18

2.2. ブリュネの頻度表

この頻度表は、ブリュネ Étienne Brunet が、*Trésor de la langue française* の膨大なデータベースをもとに、最も頻度の高い 1500 語近くを集めたものである。これは Brunet (1981) として出版されているが、フランス教育省のインターネットのサイト Eduscol でもダウンロードすることができる。(http://eduscol.education.fr/pid23250-cid50486/vocabulaire.html)

この Brunet の頻度表では、上位 100 語は次のようになっている。

Brunet の頻度表:

le (冠詞), de (前置詞), un, et, être, à, il, avoir, ne, je, son, que (接続詞), se, qui, en (前置詞), ce, dans, du, elle, au, de (限定詞), ce, le (代名詞), pour, pas, que (代名

詞), vous, par, sur, faire, plus, dire, me, on, mon, lui, nous, comme, mais, pouvoir, avec, tout, y, aller, voir, en(代名詞), bien, où, sans, tu, ou, leur(限定詞), homme, si(副詞), deux, mari, moi, vouloir, te, femme, venir, quand, grand, celui, si(接続詞), notre, devoir, là, jour, rendre, même(副詞), votre, tout, rien, encore, petit, aussi, quelque(限定詞), dont, tout, mer, trouver, donner, temps, ça, peu, même(形容詞), falloir, sous, parler, alors, main, chose, ton, mettre, vie, savoir, yeux, passer, autre.

2.3. Lonsdale & Le Bras 『頻度辞典』

これは、フランスとフランス語圏の話し言葉と書き言葉のコーパス資料から集められた 2300 万語のデータをもとに、最も頻度の高い 5000 語のリストを提供した辞典である (Lonsdale, D. & Y. Le Bras. 2009. *A Frequency dictionary of French Core Vocabulary for Learners*. New York : Routledge) .

これによると、上位 100 語は次のようになる。

le(冠, 代), de(限, 前), un, à, être(名, 動), et, en(前, 代), avoir(名, 動), que(副, 接, 代), pour, dans, ce(限定詞, 代名詞), il, qui, ne, sur, se, pas(副詞, 名詞), plus, pouvoir(名詞, 動詞), par, je, avec, tout, faire, son(限定詞, 名詞), mettre, autre, on, mais, nous, comme, ou, si(副, 接), leur(限, 代), y(副, 代), dire, elle, devoir, avant, deux, même, prendre, aussi, celui, donner, bien, où, fois, vous, encore, nouveau, aller, cela, entre, premier, vouloir, déjà, grand, mon, me , moins, aucun, lui, temps, très, savoir, falloir, voir, quelque(副, 形, 限), sans, raison, notre, dont, non , an, monde, jour , monsieur, demander, alors, après, trouver, personne(名, 代), rendre, part, dernier, venir, pendant, passer, peu, lequel, suite, bon, comprendre, depuis, point(副, 名), ainsi, heure, rester. (同上, pp. 9-12)(見出しのみ)

これらのデータを比較してみると、初めの 2 つのデータには、話し言葉と書き言葉の違いが明確に出ている。すなわち、グーゲネームの『基礎フランス語』では、話し言葉である *ça* や *ah*, *oh* などが 50 位内に入っているのに対し、ブリュネの「頻度表」には *ah*, *oh* はなく、*ça* も 50 位以下となっているなど、書き言葉の特徴が現れている。

それに合わせて考えると、3 番目の『頻度辞典』は、*ça* や *ah*, *oh* などが見られず、書き言葉としての特徴が顕著である。

逆にこれら 3 つのデータに共通して言えるのは、使用頻度の高い語には、冠詞、代名詞、前置詞、否定の副詞など、いわゆる機能語が多いということである。

3. 語彙の多い分野

どのような分野で語彙数が多いか、日常語の範囲で考察してみる。

3.1.日本語の場合

金田一(1957)(1988)(2001)によると、日本語には、天候、季節、水、地形、魚、虫、木、人、称、感情、擬態語などに語彙が多いという。たとえば：

雨：嵐(あらし)、夕立(ゆうだち)、小雨(こさめ)、氷雨(ひさめ)、春雨(はるさめ)、五月雨(さみだれ)、梅雨(つゆ)、秋雨(あきさめ)、時雨(しぐれ)、風花(かざはな)、野分(のわき)、霧雨(きりさめ)、霰(あられ)、雹(ひょう)、雨脚(あまあし)、雨宿り、... .

風：疾風(はやて)、東風(こち)、空っ風、山嵐(おろし)、凧(こがらし)、凧(なぎ)...など。関口武『風の事典』によると日本には2千を超す風の呼び名があるらしい(朝日新聞 2010年3月22日付「天声人語」)。嵐、凧、凧は国字²。

季節・時節：月名(睦月、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、文月、葉月、長月、神無月、霜月、師走)、月の形状と日(三日月、十三夜、十五夜、望月、十六夜、立待ち、居待ち、臥待ち、...), 季語(小春、暮れ、大晦日、松の内、など)。

地形：海、瀬、洲、沖、灘、浦、海原、山、尾根、峠(国字)、沢、里山、山肌、裾野、野、原、野原、....

水：水、湯、白湯(さゆ)、澄む、濁る、ぬるむ、垂水(たるみ)(=落ちる水)、....

水関係の比喻が多いとの指摘もある(朝日新聞 2013年8月22日付「天声人語」)。「水もしたたる」「水を向ける」「水も漏らさぬ」「水に流す」「水が入る」「水入り」「水を差す」「水くさい」....

火・火事：火災、大火事、小火(ボヤ)、粗相火、失火、自火、貰い火、放火、付け火、山火事、飛び火、火の用心、消火、鎮火、防火、火事見舞い、類焼、火の手、火の元.... 火事関係の語彙の多さに驚いたのは英国人学者チェンバレンだった(朝日新聞 2013年2月22日付「天声人語」)。木と紙で出来ている日本の家は火に対して非常に弱いという(金田一, 1988, p.211)。水の裏返しか。

魚：「魚」偏の国字(鮭、鱒、鱈、鯉、鮒、鰯、鯰、鰱、鰻、...), 出世魚、初もの(初ガツオ、など)、旬もの(戻りガツオ、寒ブリ、など)、部位名称(カブト、カマ、オノミ、チアイ、など)、.... 国字の中で「魚」偏が一番多い(金田一, 1988, p.175)。

虫：コオロギ、バッタ、ギリギリス、イナゴ、ウマオイ、マツムシ、オケラ、ミズスマシ、セミ各種、鳴き声各種、トンボ各種、蝶各種、蛾、カブトムシ、クワガタ、...

木：国字の数が二番目に多いのが「木」偏(金田一, 1988, p.175)。

これらは厳密な基礎語の定義と客観的な統計比較に基づいた議論ではなく、日常語のレベルにおけるものであるが、経験的・直感的には頷けよう。

3.2.フランス語の動物名称

これに対しフランス語では、動物に関して、名称の細分化が著しいことはよく知られている。

例えば、日本語でウシは、オスでもメスでも子供でもウシ(オウシ、メウシ、コウシ)と言う。フラ

² 国字は日本で独自に発明された漢字である。これは日本独自の概念が文字化されたものと考えられ、これが多い分野は、外国語には訳せない語が多い分野と言える。

(表1) 動物名称

日本語名称	総称	大人		子	
		雄	雌	雄	雌
ウシ	bœuf	taureau	vache	veau (bouvillon, taurillon)	génisse
ブタ	cochon, porc	verrat porc	truie porque	goret, porcelet cochonnet	
ウマ	cheval	étalon	jument (poulinière)	poulain poney	pouliche ponette
ヒツジ	mouton	bélier	brébis	agneau	agnelle
ヤギ		bouc	chèvre bique	chevreau biquet	chevrette biquette
ニワトリ	coq	coq, poulet	poule	poussin	poussine
ガチョウ	une oie	jars	oie	oison	
カモ, アヒル		canard	cane	caneton canardeau	canette
七面鳥		dindon	dinde	dindonneau	
ハト		pigeon	colombe		
イヌ		chien	chienne	chiot	
ネコ		chat	chatte	chaton	
ロバ		âne	ânesse	ânon	
ラバ		mulet	mule		
ウサギ		lapin	lapine	lapereau	
野ウサギ		lièvre	hase	levraut	
シカ		cerf	biche	faon	
ダマシカ		daim	daine	faon	
ノロジカ		chevreuil	chevrette	faon	
イノシシ		sanglier	laie	marcassin	
オオカミ		loup	louve	louveteau, louveteau	
キツネ		renard	renarde	renardeau	
ネズミ		rat	rate	raton	
ハツカネズミ	une souris				
ライオン		lion	lionne	lionceau	
トラ		tigre	tigresse	tigron	
クマ		ours	ourse	ourson	
キリン	une girafe			girafeau, girafon	
ゾウ	éléphant			éléphanteau	
サル		singe	guenon		
クジャク		paon	paonne	paonneau	
オウム		perroquet	perruche		
ツグミ		merle	merlette	merleau	
カササギ	une pie			piat	

ンス語では、一般に(総称として、または去勢した場合、食用の場合など) *un bœuf* と言うが、オス、メスを区別して *un taureau*, *une vache*, 子牛のオスを *veau*, メスを *génisse* などと言う。このような例は少なくない。いくつかを表にしてみる。(表 1)

これらはほんの一例であり、それぞれにさらに細かい名称があるものもあるが、このように、動物、とくに家畜、家禽類に細かい名称が存在する。

すべての名詞が男性、女性に分類されるフランス語では、オス、メスが区別されることに不思議はないかもしれない。実際、キツネのようにオスの名の語尾に *-e* を添えて自動的に作ったと思われる形式的な女性形がメスの名になっている単純なものもある(*renard / renarde*)。しかしウシやブタ、ウマ、ヒツジなどでは、親子雌雄が形はかなり異なる名称をもっている。これはこれらの動物が家畜として、また食用として、古くから身近な動物であったことと無関係ではない。異なる名称をつけることで明確に区別する必要があったのだろう。

また、家畜でなくても、形態に顕著な違いがみられるため、子の別名称をもつものが多い。中には、オス・メスの区別はなくても、子の別名をもつものもある。キリン *girafeau*, *girafon*, ゾウ *éléphantéau* など。

それに対して日本語では、ウシも含め、ほとんどの動物が「オ(ス)」「メ(ス)」「コ」をつけて、「オスブタ」「メスブタ」「コブタ」、「オンドリ」「メンドリ」などとなり、「ヒヨコ」「ウリボウ(イノシシの子)」のような別名称が作られるのは稀である³。

さらに、同種でも別の名称を与えて細かく区別するものが見られる。

シカ: *le cerf*(シカ, とくにアカシカ), *le daim*(ダマシカ), *le chevreuil*(ノロ(ジカ))

ネズミ: *le rat*(ネズミ), *la souris*(ハツカネズミ) cf. 英語 *rat, mouse*

ウサギ: *le lapin*(飼うウサギ), *le lièvre*(野ウサギ) cf. 英語 *rabbit, hare*

ハト: *le pigeon*, *le (pigeon) ramier*(モリバト), *la tourterelle*(キジバト)

カラス: *le corbeau*(総称), *la corneille*(小型), *le choucas*(コクマルガラス)

ウズラ: *la caille*(ウズラ), *la perdrix*(ヤマウズラ)

フクロウ: *l'hibou (f)*フクロウ, *la hulotte*モリフクロウ, *la chouette*ミミズク

カエル: *la grenouille*(カエル), *le crapaud*(ヒキガエル)

これらも日本語では「～シカ」「～ネズミ」というように下が同じ名称になることが多い。

やや専門的になるが、猟師などは、シカ *cerf* の子供を *le hère* (6 ヶ月～1 歳), *le daguet* (2 歳), *la seconde tête* (3 歳) などと区別したり(松原 1974, p.135), 5 歳のダマシカを *le*

³ もちろんフランス語にも総称だけでオス、メスの区別がないものもある。その場合は、日本語のように「オス」「メス」をつけることになる。

un éléphant mâle / un éléphant femelle (ゾウのオス/メス)

ただし、このような通性名詞 *noms épiciques* は男性名詞とは限らず、女性名詞もある。

une girafe mâle / une girafe femelle (キリンのオス/メス)

その他の通性名詞としては、*un héron* (アオサギ), *un pinson* (アトリ) [鳥], *une pie* (カササギ), *une souris* (ネズミ) *une grenouille* (カエル), *une guêpe* (ジガバチ) などがある。

paumier と呼ぶことがある。これは日本語の出世魚を想起させる。

同様に、ウマの名称は 70 語に及ぶという報告もある。(島岡 1982, p.63)

3.3.動物の鳴き方

動物については、名称だけでなくその鳴き方も多様な語彙が用いられる。

日本語では、動物は一般に「鳴く」と言い、細かい鳴き声の違いは「ニャンニャン(鳴く)」「ワンワン(鳴く)」などの擬音語(擬声語, オノマトペ. 後述)で表す。

それに対し、フランス語では、*miaou*(ニャー), *(w)oua(h)-(w)oua(h)*(ワンワン)のような純粹に鳴きまねだけを示すものだけでなく、動詞として *miauler*(ニャーと鳴く), *aboyer*(ワンワン鳴く, 吠える)という語が形成されている。以下に、列挙してみよう。(表 2)

(表 2) 動物の鳴き方⁴

家畜・家禽・小動物

動物名	鳴き方 (イタリックは動詞. ※は鳴き声)	例文
猫	<i>miauler</i> (ニャオと鳴く), <i>ronronner</i> (ゴロゴロ鳴く), <i>feuler</i> (うなる) ※(faire) <i>miaou</i> , <i>ronron</i> , <i>frr</i>	Le chat <i>miaule</i> , <i>ronronne</i> .
犬	<i>aboyer</i> (吠える), <i>clatir</i> , <i>grogner</i> (うなる), <i>japper</i> (キャンキャン鳴く), <i>clabauder</i> (吠え立てる), <i>hurler</i> ※(w)oua(h)-(w)oua(h), aï aï, aou	Le chien <i>hurle</i> , <i>jappe</i> , <i>aboie</i> , <i>gronde</i> . [オオカミより細かい.]
オオカミ	<i>hurler</i> ※hou hou [犬ほど細分していない.]	Le loup <i>hurle</i> .
ウサギ	<i>clapir</i> , <i>couiner</i> ※ <i>crr-crr</i> , <i>crunch</i>	Le lapin <i>clapit</i> . しかし Le lièvre <i>vagit</i> .
ウマ	<i>hennir</i> (いななく), <i>s'ébrouer</i> ※hi	Le cheval <i>hennit</i> .
ロバ	<i>braire</i> ※hi-han [i-ā]	L'âne <i>brait</i> .
ウシ	<i>meugler</i> , <i>beugler</i> , <i>mugir</i> ※(faire) <i>meuh</i> , <i>beuh</i>	La vache <i>beugle</i> , <i>meugle</i> . Le taureau <i>mugit</i> .
ブタ	<i>grogner</i> ※ <i>coui coui</i> , <i>groin-groin</i> , <i>grouic</i>	Le cochon, le porc <i>grogne</i> .
ヒツジ	<i>blatérer</i> , <i>béler</i> ※bêêê, bé, mé	Le bélier <i>blatère</i> . La brebis, le mouton <i>bèle</i> .
ヤギ	<i>béler</i> , <i>bégueter</i> ※bé, mé	La chèvre <i>bèle</i> .
ラクダ	<i>blatérer</i> ※brouuu	Le chameau <i>blatère</i> .
シカ	<i>bramer</i> , <i>braire</i> , <i>râler</i> , <i>raller</i> , <i>réer</i> , <i>roter</i>	Le cerf <i>brame</i> , <i>brait</i> , <i>rée</i> , <i>rote</i> . La biche, le chevreuil, le daim

⁴ 表 1, 表 2 は、主に以下の文献を参考に作成した。Delas & Delas-Demon (1979), p.165, Hamon (1992) pp. 102-106, 松原(1996 < 1974) pp.356-357, 『プチ』, 『ロワ』, GR. 鳴き声は主に Enckelle & Rézeau (2003), pp. 40-53.

		<i>brame</i> . Le faon <i>râle</i> .
キツネ	<i>glapir</i>	Le renard <i>glapit</i> .
イノシシ	<i>grommeler</i> ※groin-groin	Le sanglier <i>grommelle</i> .
ネズミ	<i>chicoter</i> ※couic, crr-crr, crunch	Le souris <i>chicote</i> .

猛獣

ゾウ	<i>baréter, barrir</i> ※brrroa	L'éléphant <i>barète, barrit</i> .
ライオン	<i>rugir</i> ※grr, meuh	Le lion <i>rugit</i> .
トラ	<i>feuler, râler, rauquer</i>	Le tigre <i>râle, rauque, feule</i> .
ワニ	<i>lamenter</i>	Le crocodile <i>lamente</i> ⁵ .
クマ	<i>gronder, grogner, hurler</i> ※hou hou	L'ours <i>gronde, grogne, hurle</i> .

鳥類

鶏	<i>glousser, caqueter, coqueriquer</i> ※coquerico, cocorico, cot cot cot <i>crailler, piauler, pépier, piailler</i> ※cui-cui, piou piou	La poule <i>glousse, caquette</i> . Le coq, Le poulet <i>chante, coquerique</i> . Le poussin <i>piaule, pépie, piaille</i> .
ひな鳥	<i>piailler</i>	
スズメ	<i>pépier</i> ※couic, cuic, cuicui	Les moineaux <i>pépiant</i> .
ヒバリ	<i>grisoller, tirelirer, turluter, chanter</i> ※tireli	L'alouette <i>grisolle, tirelire, turlute</i> .
ウグイス	<i>gringotter, chanter</i> ※tireli	Le rossignol <i>gringotte</i> .
小鳥	<i>gazouiller, chanter, pépier</i>	Les petits oiseaux <i>gazouillent</i> .
ツバメ	<i>gazouiller, trisser</i> ※cui-cui	L'hirondelle <i>gazouille</i> .
ウズラ	<i>carcailler, margotter, cacaber, courailler, pituiter</i>	La caille <i>carcaille, margotte</i> . ※cat-caillou
ヤマウズラ, イワシャコ	<i>cacaler, cacaber</i> ※cot cot cot	La perdrix <i>cacale</i> .
ツグミ	<i>babiller, siffler</i>	Le merle <i>babille, siffle</i> .
ハト	<i>roucouler, pépier, gémir</i> ※coucourou, crou-crou, glou glou, rou rou	Le pigeon, La colombe, Le ramierモ リバト, La tourterelleキジバト <i>roucoule</i> .
カモ	<i>nasiller, cancaner</i> (cancaner悪口を言う)	Le canard <i>nasille, cancane</i> .
アヒル	<i>cancaner</i> ※coin-coin ※cancan (幼児語) = canard ⁶	Le canard <i>cancane</i> .
ガチョウ	<i>brailler, siffler, cacarder, criailler, jargonner</i> ※coin-coin	L'oie <i>braille, siffle, cacarde, criaille</i> . Le jars <i>jargonne</i> . (言葉遊び ⁷)
オウム	<i>jaser, parler, siffler</i> ※prrr prrr	Le perroquet <i>jase, parle, siffle</i> .

⁵ ワニは *lamenter* 「嘆く」という。これはワニの目が涙を流して泣いているように見えることにかけた言葉遊びからできた表現だと思われる。この習性から、*larmes de crocodile* (直訳「ワニの涙」)「そら涙」という表現もできている。

⁶ 幼児語で、*canard* のことを *cancan* と言う。

⁷ メスのガチョウ *jars* が鳴くのを *jargonner* 「隠語 *jargon* を使う、ブツブツ言う」と言うのは、音の類似にかけた言葉遊びからできた表現だと思われる。

カラス	<i>croasser, crailler</i> ※coua, couac, croa	(総称) Le corbeau <i>croasse</i> . (小型) La corneille <i>craille</i> . (× <i>criaille</i>)
カササギ	<i>jacasser, jaser, babiller</i> ※cacacacaca	La pie <i>jacasse, jase, babille</i> .
キジ	<i>criailler</i> (わめき散らす) ※cot cot	Le faisan <i>criaille</i> .
七面鳥	<i>glouglouter</i> ※glou glou, pia-pia	Le dindon <i>glougloute</i> .
ホロホロ鳥	<i>criailler</i>	La pintade <i>criaille</i> .
クジャク	<i>criailler, brailler</i> ※léon	Le paon <i>criaille, braille</i> .
ヤマシギ	<i>crouler</i>	La bécasse <i>croule</i> .
カケス	<i>cajoler, jaser</i>	Le geai <i>cajole, jase</i> .
フクロウ ミミズク	(h) <i>ululer, huer, chuinter</i> <i>hôler</i> ※hou hou, chou chou (chouette), bou bou (hibou)	L'hibou フクロウ <i>hue, (h)ulule</i> . La chouette ミミズク <i>hue, (h)ulule, chuinte</i> . La hulotte モリフクロウ <i>hôle</i> .
カッコウ	<i>coucouler</i> ※coucou, hou hou	Le coucou <i>coucoule</i> .
アトリ	<i>ramager</i>	Le pinson <i>ramage</i> .
コウノトリ	<i>craquetter, glottorer, craquer</i> ※clacla	La cigogne <i>craquette ou glottore</i> .
ツル	<i>trompeter</i> (< trompette)	La grue <i>trompette</i> .
ハクチョウ	<i>siffler, trompeter</i>	Le cygne <i>siffle, trompette</i> .
ワシ	<i>glatir, trompeter</i>	L'aigle <i>glatit, trompette</i> .

その他

カエル	<i>coasser</i> ※brek brek, coa/coac/croa, corex/corex, crr-crr, grr, kékéké	La grenouille, Le crapaud ヒキガエル <i>coasse</i> .
ヘビ	<i>siffler</i> ※bzz	Le serpent <i>siffle</i> .
ハチ, ハエ	<i>bourdonner</i> ※bzz, dzz, zonzon, zzz	L'abeille, le bourdon, la mouche <i>bourdonne</i> .
セミ	<i>chanter, craquer, craqueter,</i> <i>striduler</i> ※cricri, zzz	La cigale <i>chante, stridule</i> .
コオロギ	<i>grésiller, grésillonner</i> ※cricri	Le grillon <i>grésille</i> . (ジュウジュウ いう)
クジラ	※baunnn	

このように、フランス語では動詞化された鳴き声のオノマトペが細かく作られていることが特徴と言える。また、その意味は音からある程度類推できる。

一方、日本語では、「鳴く」以外の動詞を用いるのは、「(犬, 猛獣が)吠える」, 「(馬が)いななく」, 「(小鳥が)さえずる」, 「うなる」などいくつかに限られている⁸。その代わりに、「ニャーニャ

⁸ やや特殊な例では「クイナがたたく」, 「鶏が時を作る」, 「ウグイスが経を読む」, 「ホトトギスが

一(と)鳴く」というように、オノマトペに「鳴く」をつけた表現は種類が多い。またある程度自由に創作できる。

フランス語でも « faire miaou » というように faire を用いて表わされる。今回表を作ってみて、miaou, ronron などの鳴き声の種類は意外に多く、カエルやカササギの鳴き声のように、小説などにおいて比較的自由に創作も行われていることが分かった(Enckelle & Rézeau, 2003)。

また、ウマとロバ、ヒツジとヤギ、アヒルとガチョウなど、日本語ではほとんど違いを表現しないものでも、フランス語では異なる鳴き声や動詞が用いられている。とくに鳥については、フランス語は多様な動詞を作っている。

鳥については、日本語に「聞きなし」というのがある。これは「ホー法華経」(ウグイス)、「てっぺんかけたか」(ホトギス)というように、鳴き声を意味のある言葉になぞらえて表す。そのほかにも、「阿呆、阿呆」(カラス)、「仏法僧」(コノハズク)、「ぼろ着て奉公」(フクロウ)、「土食って虫食って渋い」(ツバメ)、「一筆啓上仕(つかまつ)り候」(ホオジロ)、「特許許可局」(ホトギス)(朝日新聞 2007 年 5 月 27 日付「天声人語」)などがある。このように、一種類に特定化された鳴き声が限られた一部の鳥にみられる。フランス語ではこのような限定度の高い鳴き声の動詞もあるが、いくつかの鳥に共通に用いられる動詞も多い。

他方、フランス人は虫の声に全く無関心である⁹。一応、鳴き声を表す動詞が作られているが、「(コオロギが)鳴く」を意味する *grésiller* は、「じゅうじゅう、ざあざあ」という音の動詞を借用しているもので、コオロギ独自のものではない。また、フランスでは南部に行かないとセミが見られないため、日本に来て初めて見たというフランス人は、マンガのミーンミーンという文字が読めても何を意味するか理解できなかったという報告がある(蛇蔵&海野凧子, 2012, p.34)。

それに対し、日本語では、リリリリ(コオロギ)、リーンリーン(松虫)、チンチロリン(鈴虫)、スイッチョン(馬追い)、ミーンミーン(ミンミンゼミ)、ジージー(アブラゼミ)、カナカナ(ヒグラシ)、ツクツクポーシ・オーシーツクツク(ツクツクボウシ)というように、さまざまな虫やセミの名称と鳴き声を区別する。

このように、種によってそれぞれの言語で得意、不得意分野があるので、一概には言えないが、動物名称と同様、鳴き声についてもフランス語が多様な語彙を持っていることは否定できない。

3.4.他の動物関連の語彙

動物、とくに家畜の語彙について、フランス語のこだわりがうかがわれる例として、いくつか挙げておく。

一つは、家畜小屋(「馬小屋」「牛小屋」「豚小屋」「羊小屋」...)が、いちいち別の単語になっ

名告(なの)る」などがある(金田一, 1988, p.178)。金田一は、日本語の動物名の中では、鳥が豊富な名前を持っていることを指摘している(同書)。

⁹ ただし、『プチ』には、次の項目がある。

「cri-cri, cricri /kri-kri/ (<擬音) [男] コオロギ・セミなどの) 鳴き声 ②((話)コオロギ)

この辞典を検索した限りでは、虫の声の擬音(擬声)語はこの項目しか見つからなかった。コオロギもセミも同じ鳴き声なのは興味深い。

ていることである(金田一, 1988, p.207). すなわち,

「家畜小屋」*étable*
「牛小屋」*étable (à vaches)*
「馬小屋・厩舎」*écurie*
「豚小屋」*porcherie*
「羊小屋」*bergerie*
「鶏小屋」*poulailler (m)*(または *cage à poules*), *basse-cour*
「鳥小屋」*cage à oiseaux*
「鳩舎」 *pigeonnier (m)*, *colombier (m)*
「兎小屋」*clapier (m)*(または *cabane à lapins*)
「犬小屋」*chenil (m)*または *niche*

(Sommant 2003, 『プチ』より. 男性名詞のみ(m)を付した).

日本語ではほとんどが「～小屋」となる. 牛舎, 厩舎(きゅうしゃ), 厩(うまや), 鳩舎(きゅうしゃ)などでも, 「牛」「馬」などの動物名が音や文字によって明確に見てとれる. それに対し, フランス語では, 動物の名前と「小屋」を示す部分が融合しているものが多い.

さらに, 日常生活用品の名に動物名に由来するものが見られることが指摘されている(Hamon, 1992, p.106-107). すなわち,

baudet(ロバ)「木挽き台」
bélier(雄羊)「杭打ち機」
bidet(子馬)「ビデ」
bédane (= *bec d'ane* アヒルの嘴)「鑿(ノミ)」
chenet(犬の頭)「(暖炉の)タキギ台」
chevalet(馬の卑小辞)「イーゼル, 駒, ブリッジ」
chèvre(ヤギ)「クレーン, ジャッキ」
goupille(雌狐の本来の名)「留めピン」
landier(子牛の頭)「大型薪のせ台」
poutre(子馬)「梁, 平均台」
porcelaine(子豚)「磁器」
robinet(羊の愛称 *robin*)「蛇口, コック」
vaccin(ウシ *vache*)「ワクチン」
velin(子牛の皮)「犢皮(とくひ), 上質紙」

最後の2語は, 動物が材料として用いられている(いた)ことからくる命名だが, 他の語はその形状や使用形態などからの連想だと考えられる. その他にも, *grue*(ツル)が「クレーン」を表すなどがある. 日本語では, 「蛇口」がそれと同様の命名であろう.

3.5.身体部位名称

フランス語が比較的多くの語彙をもつと言われる分野に身体部位名称がある。(表 3) (『プチ』などを参考に作成した。)

(表 3) 身体部位名称

口	la bouche (人間), la gueule [俗語], la gueule (動物), le bec (鳥のクチバシ)
鼻	le nez (人間), le tarin [話語], le pif [俗語], le nase [俗語], la narine 鼻の穴 le museau (動物), le groin (豚・猪など), la trompe (象)
顎 アゴ	la mâchoire, les mandibules (f,pl) [俗語], le menton (顎先)
手	la main, la paume 掌 (手の平), le dos de la main 手の甲, le poignet 手首, le bras 腕・かいな, le doigt 手先・指, la patte (動物)
足	le pied 足[アシ], la jambe 脚[アシ]・脛[スネ], la cuisse 腿[モモ] les pattes (動物) 四つ足, échasse (f) (フラミンゴの) 長い足 le talon 踵・きびす, le tibia 向う脛[ズネ], le mollet 脹脛[フクラハギ], le dos du pieds / le cou-de-pied 足の甲, la pointe des pieds 爪先
指	le doigt (手), orteil (m) (足) (= doigt de pied) pouce (親指), index (人差指), majeur (中指), annulaire (薬指), auriculaire / petit doigt (小指) [以上すべて(m)]
爪 ツメ	ongle (m), la griffe (鳥獣), la serre (鷲など), le sabot 蹄[ヒヅメ] ※le plectre, le médiator (マンドリンなど楽器を弾くためのツメ)
髭 ヒゲ	la moustache (口髭), la barbe (顎[アゴ]ひげ・頬ひげ), la barbiche (←barbe) (小さなとがった) 顎ひげ・やぎひげ, la barbichette (←barbiche) [話] 小さなやぎひげ, les pattes ほおひげ・もみあげ, les favoris (頬ひげ・もみあげ), ※la moustache (猫・ライオンなど)
内臓 entrailles / viscères	coeur 心臓, estomac 胃, poumon 肺, rein 腎臓, foie 肝臓, intestin 腸/boyau (動物), cæcum [sekɔm] / appendice vermiforme 盲腸 [以上すべて(m)], la vésicule biliaire 胆嚢, …

この表から、フランス語の身体部位名称語彙について次のようなことが言える。

- 俗語表現のあるものがある(「口」「鼻」「顎」など)。日本語には「まなこ」などの他にはあまり見られない。
- 人間と動物で異なる名称をもつものがある(「口」「鼻」「手足」「爪」「髭」など)。日本語では、「くちばし」以外、手足など、人間と動物を区別しない。「ヒヅメ」「ケヅメ」も「爪」で人間と共通している。
- 人間の身体名称で日本語より細かい分類をもつものがある。場所によって異なる名で呼ばれる「髭」は、日本語では「～ひげ」というように、同じ名称でまとめられている。同様に「指」も、日本語ではすべて「～指」という名称なのに対し、フランス語では(必ずしも指だけに用いられる語彙ではないが)一本ずつ異なる名称をもつ。また、内臓の名称については、日本語の対応する名称はほとんどが漢語であり、本来の和語はあまり見られない。
- 動物の種類によってさらに細かい分類をもつものがある(「口」「鼻」「爪」など)。日本語では、

豚もゾウも「鼻」をもつ。

このように、身体部位の名称も、日本語よりフランス語の方が語彙が豊富であると言える。

また、動物については、ウシやヒツジなどの肉の部位が非常に細かく分けられ、異なる名称によって区別されていることが知られている。これは、肉食文化の反映であり、魚食文化の日本語で魚の種類や部位の名称が細分化されているのと対照的である。

3.6.料理関係

料理関係の語彙にも、上述の肉食文化との関わりを感じさせる特徴が見られる。

たとえば、フランス語には「むく・はぐ」にあたる動詞が日本語よりも多く、それぞれ対象によって使い分けられていることが指摘されている(泉, 1975, p.15; 1978, pp.46-51)。

むく・はぐ:

éplucher	野菜, 果物, えび・かきの殻, 傷んだ部分をむく, はぐ
peler	果物・野菜の皮をむく, はぐ
écosser	豆類のさやをむく
décortiquer	幹や根の皮をはぐ, 果実や穀物の外皮をむく
écorcher	動物の皮をはぐ
dépouiller	動物の皮, 木の皮, 魚の皮をはぐ

また、料理のしかたについても日仏それぞれの特徴が見られる。次のリストはフランス語の食物を加熱する方法を表す語彙である¹⁰。

加熱する:(faire) cuire 加熱して料理すること一般

焼く: griller	網焼きする
rôtir	オーブンで蒸し焼き・串焼きにする・ローストする
poêler	フライパンで焼く・炒める・鍋で蒸し焼きにする
brasiller	炭火(おき火)で焼く
faire revenir	軽く焼き色をつける
(faire) sauter	炒める
煮る: bouillir	茹でる・煮る
braiser	蒸し煮にする(Roy), 蒸し焼きにする(森本・舟杉 2009)
étuver	蒸し煮にする
faire mijoter	煮込む
fricasser	フリカセにする, ホワイトソースで煮込む

¹⁰ ここにあげたフランス語動詞は、連語辞典 Le Fur, D. (dir.), 2007, p.1109 « viande »の項, および森本・舟杉(2009, p.168)より採録した。またそれぞれの語の意味は『プチ』『ロワ』などを参考にした。

燻す: boucaner 燻製にする
fumer 燻製にする

このように、フランス語では、どういう道具で肉を焼くかによって語彙が細分化されている。日本語では、それらを過不足なく表す語がなく、「～で焼く・～焼きする」という表現になることが多い。さらに、「燻製にする」という動詞が2つあり、これらを日本語で訳しわけるのは難しい。またフランス語では、焼き具合 *cuisson* に関する表現として、上の *faire revenir* (軽く焼き色をつける) という動詞表現以外に、*saignant* (あまり火を入れない。レア), *à point* (中くらい。ミディアム), *bien cuit* (よく焼いた, ウェルダン) という3段階、さらに *bleu* (超レア) を入れて4段階の形容詞〔副詞〕表現がある。

一方、日本語は「煮る, 炊く, ふかす, 蒸す, 茹でる, 揚げる」と水や油を用いた加熱方法を示す語彙が豊富である。

3.7.天体, 星

日本人は星にあまり関心がないらしく、日本語には星を表す語彙が少ない(金田一, 2001, p.125)。日(太陽), 月の他, 星を表す和語は「ほし」と「すばる」くらいしかないという(金田一談)。それ以外の天体に関する語彙もほとんどが漢語である。

以下に、「天体・星」に関するフランス語の語彙をいくつか集めてみる。

宇宙 *univers* (m), *espace* (m), *cosmos* (m), *firmament* (m) 天空, *ciel* (m) 空
zénith (m) 天頂, *nadir* (m) 天底

天体・星 *astre* (m), 星 *étoile* (f)

planète (f) 惑星, *astéroïde* 小惑星, *satellite* (m) 衛星, *météore* (m) 流星,
comète (m) 彗星, *étoile filante* (f) 流れ星, *météorite* (f), *bolide* (m) 隕石,
(*étoile*) *naine* (f) 矮星, *nova* (f) 新星

nébuleuse (f), *galaxie* (f) 星雲, *Galaxie* 銀河 = *Voie lactée* 天の川,
halo (m) 太陽・月のかさ, ハロ

太陽系 *système solaire*

soleil (m) 太陽・日, *lune* (f) 月

水星 *le Mercure*, 金星 *la Vénus*, 地球 *la Terre* / *le globe* (terrestre), 火星 *le Mars*, 木星 *le Jupiter*, 土星 *le Saturne*, 天王星 *Uranus* (m), 海王星 *le Neptune*,
冥王星 *le Pluton*

星座 *constellation* (f), *Zodiaque* 黄道帯:

le Bélier 牡羊座, *le Taureau* 牡牛座, *les Gémeaux* 双子座, *le Cancer* 蟹座, *le Lion* 獅子座, *la Vierge* 乙女座, *la Balance* 天秤座, *le Scorpion* 蠍座, *le Sagittaire*
射手座, *le Capricorne* 山羊座, *le Verseau* 水瓶座, *le Poisson* 魚座.

astronomie (f) 天文学, *astrologie* (f) 占星術, *cosmologie* 宇宙論

astronef (m), *cosmonef* (f) 宇宙船, *astronaute*, *cosmonaute* 宇宙飛行士,

étoilement (m) 星の出ること・星型,

étoiler 星をちりばめる, *étoilé* 星をちりばめた

consteller 星で覆う・ちりばめる, constellé 星をちりばめた
stellaire 星の・星形の

太陽系の惑星の名前は神話の登場人物から、星座の名前は動物の名前から取っている
ので、必ずしもすべてが星関係の名称として特別に作られたわけではない。しかし、それらに名
を与えて区別するということに関心の高さがあると言える。

3.8.分野の語彙数と文化

語彙の数は存在するものの数の違いに比例するわけではない。言語化する方法によって、
新語が多くなりやすい言語と、増えにくい言語があることは、第 1 節で述べた。

同様に、分野によって語彙が豊富かどうか、その分野にもものが多いかどうかということと必
ずしも同じではない。

むしろその分野に対する関心の高さが問題になる。関心が高く、細かい分類が必要となる場
合、その分野には早い時代から、基礎的な語彙が豊富になるのである。その意味で、語彙に
は様々な文化、生活様式、食文化の違いが反映されていると考えられる。

したがって、狩猟民族、肉食文化を基盤とするフランス語では、天体、動物、肉料理に関す
る基本的語彙が多く、農耕・漁業民族、米食文化の日本語に、天候、季節、魚介、米料理に
関する基本的語彙が多くなることは想像できよう。

ただし、必ずしも語彙が多いからその文化が発達しているとか進化しているというわけではな
い。アフリカの未開社会において雨や植物に非常に細かく名前をつけている例や、フィリピン
のある部族で、アリ 20 種、食用キノコ 45 種の名称を区別するという例などが報告されている¹¹。
このような未開社会の言語の特徴として、しばしば、これらの語彙を総括する上位概念を表す
語がないことが指摘されている¹²。

ものに名前をつけることで、われわれはそのものを知った気になる。これはある意味で、その
ものに対する思考が停止することでもある。もはやそのものが何であるかという考察をやめてし
まう。いくつかのものに始めから別々の名前をつけてしまうと、それで納得して、それらの間の
関係についても考えなくなりやすい。

西江雅之は、単語が少ない方が哲学が発達するという。つまり、「その社会が意識して問題
にしていることでありながら、実はそれを表す単語は一つか二つしかないということ」は、人々が
「一生懸命その語が持つ意味の領域や内容について哲学をやっているということ」だとい
うのである¹³。逆にいえば、細かく分類して、ラベルを張ってしまえば、それ以上、哲学は進まな
くなってしまふ。

この点で、興味深いのが、フランス語の鱈(たら)とスズキという魚の名称である。やたらに多
いのである。泉(2004, p. 28)によれば、次の名称はすべて、鱈の類だといふ。

la morue, le cabillaud, le colin, l'églefin, le lieu, la lingue, le merlan

¹¹ 前者はフランスの文化人類学者レヴィ＝ブリュル『未開社会の思惟』、後者はレヴィ＝ス
トローフ『野生の思考』による。いずれも金田一(1988), p.140.

¹² イェスペルセン。同上。

¹³ 西江雅之 2003 『「ことば」の課外授業』 p.105-106.

また、スズキの類の名称には次のようなものがあるという(同, p.29).

le bar, le loup, la perche, le sandre

このことを受けて、泉は、「このような時、日本語なら、〇〇鱈、〇〇スズキと言ってひとまとめにするだろうが、フランス語では上のように別々の語になるから、フランス人はまずこれらを同じ種類のものとは思わないだろう」という(同上).

このように、魚の命名については、家畜などの四つ足動物とメカニズムが異なり、あまり分析的な命名が行われていないと言える。

4. オノマトペ

オノマトペ *onomatopée* は、フランス語では、「人間や動物、自然、人工物の音を、分節された言語音によってまねている、またはまねているとされる語¹⁴」(Enckelle & Rézeau, 2003, p. 12)と定義されている。

日本語では、一般に「外界の音を写した言葉」(金田一, 1978, p. 5)として、擬音語という言葉の方でまとめることもあるが、これを細かく擬音語・擬声語・擬態語などと分類するのが普通で、最近では、それらをオノマトペという総称のもとでまとめるようになってきた。

4.1. 擬音語・擬声語

日本語では、外界の単なる音、無生物の音を表す擬音語と、人や動物など生物の声や鳴き声を表す擬声語とを区別することがあり(金田一, 同上, pp. 5-6), その数は多い。ヨーロッパ語では、ロマン語(ラテン系言語)よりもゲルマン語の方が多という指摘もあるが¹⁵, フランス語にも多い。

4.1.1. 擬音語

以下に、主に辞書に擬音語として載せられているものを列挙する。([] は発音. 名詞は (m)(f) でそれぞれ男性名詞, 女性名詞を示す.)

badaboum	ばたん, どすん, ごろごろ (物が落ちて転がる音)
bang	どかん, ばん (爆発音)
bing	[bi(ŋ)] ばん, びっ (打撃・衝突)

¹⁴ « un mot imitant ou prétendant imiter, par le langage articulé, un bruit (humain, animal, de la nature, d'un produit manufacturé, etc.) » (Enckelle & Rézeau, 2003, p.12).

この定義は、擬態語などをカバーしていないが、最近、日本語ではむしろオノマトペという語を擬音語や擬態語などの総称として用いる傾向がある。

¹⁵ 「どんな言語もオノマトペを包蔵している。ゲルマン語をロマン語と比べてみると、前者の方がその種類においても分量においても優るように思われる。(…) なぜならゲルマン語はロマン語よりも多くの子音をもって音節を構成し、したがって音節の種類が多様をきわめるのにたいし、ロマン語はラテン語いらいますます母音をふやし、そのけっか比較的少数の開音節しかもたないからである。」(小林英夫, 1965, p.318) ただし、開音節の多い日本語にもオノマトペが多いことを考えると、数の多さは必ずしも音節の音構成だけの問題ではないと思われる。

boum	バーン, ドカーン; ドーン, ドシン, ゴーン (爆発音・落下音)
clac	ピシッ, ピシヤリ, パチン, カッカッ (鞭・平手打ち・馬のひづめなどの音)
claquement	(m)(ドアの閉まる)パタン; (鞭(むち)の)ピシッ; (拍手の)パチパチ; (歯の)カチカチ
clic, clic(-)clac	カチッ, カチリ, パチッ, ピシッ
couic	[kwik] キュッ, キー (締め殺される時の小動物や人の叫び声)
cric	ポキッ, バリッ, メリメリ (物が折れたり破れたりする); カチッ (鍵を回す)
cric(-)crac	ポキッ, バリッ, メリメリ (物が裂けたり折れたりする音); パッパッ (すばやい動作)
crincrin	(m)(安物のヴァイオリンの)キーキー
ding	[di(ŋ)] (鐘・ベルなどの)リーン drelin-drelin りんりん
dring	[dri(ŋ)] (m) (鈴, 特にベルの)リーン, ジリン
flac	ぴちゃ, ばしゃ.
flic flac	(m) ぴしぴし, ぴしゃぴしゃ (鞭(むち), 平手打ち); ひたひた(波); びしゃびしゃ[水たまりを歩く].
floc	(m) ぴしゃ, ばしゃ (水).
flop	(m) べしゃん, ばしゃん (柔かな物が落ちた時)
froufrou	サラサラ(布ずれ)
glouglou	(m) ごぼごぼ, どくどく (液体), くうくう (七面鳥・鳩など)
paf	どすん, ばたん; ぱん, ぱちん, びしゃ (落ちる・たたくなど)
pan	ぱん, ばん (撃つ・たたく・破裂する)
patapouf	[pa-ta-puf] どしん, ずしん (物の落ちる)
patatras	どすん, がちゃん (物の倒れる(落ちる))
pif	[pif] ぱちぱち, ぱんぱん (破裂・手で打つ)
pin-pon	[pẽ-põ] パンポン, ピーポー (消防車など)
plouf	[pluf] ぽん, ぼちゃん, ぴちゃ, ぼとん (水, 柔らかな表面に落ちる音)
pouf	[puf] どすん, ばたん (鈍い落下音); どかん (破裂音)
rantanplan	= rataplan ドンドン (太鼓)
snif(f)	[snif] (m) くんくん, ふんふん (においをかぐ)
tac	カチャッ, カタッ (剣・機関銃などの乾いた音)
taratata	パッパラパー (らっぱ)
teuf-teuf	[toef-toef] (m) (エンジンの) ぱたぱた
tic(-)tac	(m) (機械・時計など) チクタク, こちこち, かちかち
toc, toc toc	トントン, コツコツ (ドアのノックなど. 繰り返す) faire toc toc à la porte ドアをこつこつとノックする.
top	(短い断続的な) 信号; (ラジオなどの) 時報信号
vlan, v'lan	ぼかつ, ぴしゃ, ばたん (殴打・ドアの開閉など)
zinzin	[zẽ-zẽ] (m) 騒々しいもの

4.1.2. 擬声語

これは人や動物など生物の声や鳴き声を表す語と定義され、基本的に発声されるものである。§.3.3.において動物の鳴き声はすでに見た。次のようなものが擬声語として挙げられる。

aïe	[aj] 痛い, 痛っ
areu areu	[a-rø-a-rø] あぶあぶ, ばぶばぶ (赤ん坊)
atchoum	[a-tʃum] ハクシヨン
brouhaha	[bru-a-a] (m) (群衆の)ざわめき, どよめき
brrr	ブルブル(寒さなど)
chuchoter	ささやく, 耳打ちする, ざわめく
chuintier	しゅうしゅう鳴らす, フクロウが鳴く chut [ʃyt]しっ, 静かに
couac	[kwak] (m) (吹奏楽器など)調子はずれの音
cri-cri, cricri	[kri-kri] (m) (コオロギ・セミなど)鳴き声
hé	《呼びかけ・注意》おい, ねえ. 《強調》Hé oui !そうですとも
hi, hi ! hi !	ひっひっ, ひいひい(泣き声・笑い声)
hi-han [i-ã]	いおおん(ロバの鳴き声)
jaser	うわさする; 悪口を言う, [鳥]さえずる; [幼児]片言をしゃべる; [小川など]せせらぐ, ((古))ぺちやくちゃしゃべる
na	ねえ, ほら, やーい; ...だってば, ...だぞ(断定・否定を強調)
ouïe, ouille	[uj] うっ, いてて; (痛み)
oust(e) [ust]	そら, それ, さあさあ(人を追い出す時・促す時)
patati, patata	ぺちやくちゃ(おしゃべり)
peuh	[pø] ふん, へっ, ふうん, へえ(軽蔑・無関心など)
pf(t) [pf(-t)], pfut [pʃyt]	ふん, へっ(軽蔑・無関心)
pioupiou (m)	((話・古)) 若い兵士, 兵卒, 兵隊
psitt [psit], pst [pst]	ちよっと, おい(人を呼んだり注意を引いたりする)
ta, ta, ta	へえ, ふうん, もういいよ(疑惑・不信・いらだち)
taratata	うん, へえ(疑惑・不信・軽蔑)
turlututu	[tyr-ly-ty-ty] ふん, よせやい, ばかな(軽蔑・不信・拒否など)
youp	[jup] よっ, うっ(歓喜・活気・いらだち)
zézayer	[ze-zɛ[e]-je] = zozoter 歯音[シュー音]不全の発音をする
zou	((南仏)) さあ, それっ, 早く

これらは、品詞としては間投詞が多いが、鳴き声でも見たように、動詞になっているものも見られる。このように、フランス語の擬声語は、動詞の形をとることも多い。(日本語では、「ざわつく, ざわめく」などのように、「～つく, ～めく」という形の動詞になることが多い。)

また、日本語、フランス語ともに、鳥の名前は擬声語から形成されたものが多い。例えば、coucou カッコウなど。

4.2.擬態語

擬態語は、「音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉」(金田一, 同上, p.7)¹⁶である。日本語には擬態語が多く、数千を数え、一般にアジアの言語には広くこの表現が用いられる(大野晋, 1989, pp.199-202)。しかし、フランス語にはほとんどないことがしばしば指摘される。

田島(1973)は、フランス語には擬音語は多いが、擬態語になるともうお手上げだといい、わずかに、pêle-mêle「ごちゃごちゃ(に)」, méli-mélo「まぜこぜ」, cahin-caha「どうにかこうにか」, flafila「見せびらかし」などがフランス語の擬態的表現といえるかも知れないという。

したがって、日本語の擬態語を翻訳するときには、「けろりと忘れる」を oublier complètement(完全に), 「ぐうぐう眠る」dormir profondément(深く), 「ゆらゆら揺れる」se balancer lentement(ゆっくり), 「すくすく育つ」grandir rapidement(急速に), 「するする登る」grimper rapidement, 「ひらりと」も「ふわふわ」も légèrement(軽く)とする以外に方法がなく、擬態語については日本語のイメージがフランス語にはほとんど全く移しえないといわざるをえないと言っている(同上)。

一方、田辺(1969)(1997)は、上のような反復形式や副詞的な表現にこだわらず、porc-épic(やまあらし)や papillon(蝶)などの名詞をフランス語の擬態語として紹介している。すなわち、porc-épic は k 音が二つならぶと痛いどげどげが如実に感じられ、papillon は、ラテン語 papilio(パタパタとなびくのぼり)から作られた語で、二枚の羽の動きが感じられるという(1969, pp. 127-129)(1997, pp.164-166)。

papillon のもとになったラテン語 papilio は擬音語であり、一方でフランス語の pavillon「旗・のぼり→展示館」という擬音語になっている。このように、擬音語や擬声語から擬態語ができることがある。例えば日本語の「ごろごろ(と音を立てて転がる)」は「(家で)ごろごろする」となると擬態語になる。

このような擬音[声]語から擬態語への移行の例だと考えられるものは少なくない。(以下の訳や説明は主に『プチ・ロワ』、『ロワ』、『クラ』, GR による。)

(音から様態へ)

blabla¹⁷ 「ぺちやくちゃ」から「おしゃべり」。 faire blabla おしゃべりする。
charivari (m) 騒がしい物音, 喧騒(けんそう); (金切り声をあげての)大騒ぎ。てんやわんや。
C'est quoi ce charivari ? Oh non, le carnage !
一体どうしたんだ? めちやくちゃじゃないか!¹⁸

¹⁶ 金田一(同上, p.8)は、擬態語をさらに次の3つに分類する。

擬態語…無生物の状態を表すもの。正当の「擬態語」

擬容語…生物の状態を表すもの。生物の動作容態を表すもの

擬情語…人間の心の状態を表すようなもの

本稿では、前2者を擬態語としてまとめ、擬情語のみを区別して後で論じる。

¹⁷ ラテン語 barbarus, ギリシア語 barbaros に由来する。(Marouzeau, 1963, *Aspects du français*. p.140)

¹⁸ B.Mouttapa 他, 漫画「Le petit PARIS」『NHK ラジオフランス語講座』2003, p.83.

couac	[kwak] (m) 「調はずれの音」から「不一致, 不調和」.
guili(-)guili	[giligili] (m) (くすぐる時の)こちよこちよ(擬声語). faire guili-guili à qn (人)にこちよこちよする, くすぐる.
pioupiou	(m) (やや古い話語) 若い兵士; 兵卒, 兵隊. ¹⁹
tagada	短く繰り返す音を示すオノマトペ. とくに馬の駆け足の音. そこから, あっという間に過ぎ去る様子を表す. Le mois d'août, tagada-tagada, s'achève. 8月 は馬の駆け足のようにあっという間に終わる.
tintin	[têtẽ] (m) グラスの触れ合う音から, 「何もないこと」 faire tintin なんにもない[なくなる], からっけつである.
toc	[tok] (m) こつこつ[ぱん, ぼん]という音から, 偽物, 模造品; 下らない物. C'est du toc! そいつは偽物だ. en toc まがいの. (形容詞) 偽の, つまらない; 滑稽な. 気の変な, ばかな.
tralala	不信・喜びの間投詞から, (m)「派手, 華美; 気取り」の意味で. cf. § 4.3. se marier en grand tralala 派手な結婚式をあげる. et tout le tralala その他いろいろと. (形容詞) un dîner assez tralala 派手な夕食会
tsoin-tsoin, tsouin-tsouin	[tswẽtswẽ] (間投詞) (俗語) ちゃんちゃん[歌の区切りに入れる楽器による合いの手] (形容詞) (俗語) 念入りな, よくできた.
zinzin	[zẽzẽ] (m) 騒々しいもの(エンジンなど)から, (形容詞) 頭が少し変な.

Enckelle & Rézeau (2003, pp. 82-83)は, 音が抽象化された表現として次のような例を挙げている.

突然の消滅(disparition soudaine) → fit, pcht, pff, pft, piouf, vrip.

速さ, 突然性(rapidité ou soudaineté d'un procès) → badaboum, boum, clac, clinc, cloc, crac, cric crac, flop, hop, paf, pan, pif paf, piaf, ploc, plof, plop, pof, pouf, poum, prr, ran, schlac, schlaf, tac, tchac, tchiac, toc, vlam, vlan, vrirt, wham, zip, zoum, zoup, djinn, fchiaff, froumm, zioupe, zit.

反撃(riposte) → tac, toc.

これらの多くは擬音[声]語としても用いられており, 破裂音[p]と, [s][ʃ][f]などの摩擦音を含むものが多いのは, 瞬発的で急激な変化の様子と風を切る音などとの類推があるのかもしれない. しかし, 音と意味との間に擬音語ほどの直接的な関係は感じられず, ここにはあきらかに擬態語としての特徴が見られる.

また, やや古いが, 速さを表すものとして次のような小説の例も挙げている.

より. 漫画は, 大騒ぎの直後の散らかった部屋.

¹⁹ 小鳥の鳴き声から若い未熟な状態を意味するようになったと考えられる.

[...] il l'a menée d'un train ! *zig et zig et zag !...* » (Willy, *Lettres de l'ouvreuse*, 1889, p.72) – 同上, p.83 (彼はそれを一気に運んだ！さっさっさつと！)

以下に、擬音語を仲介せずに「音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉」、すなわち本来の擬態語の定義に当てはまると思われるものをまとめておこう。

(反復形を用いるもの)

- cahin-caha [kaẽkaa] (副詞) どうにかこうにか Arriver *cahin-caha*.
= clopin-clopant えっちらおっちら
= balin-balan (地方語)
- chouchou,-te [ʃuʃu, -ʃut] [名] お気に入り, 秘蔵っ子.²⁰
chouchouter [ʃuʃu-te] [他動] ...を甘やかす, ちやほやする
chouchoutage (m) chouchouter の名詞.
- cracra 垢だらけの.²¹
flafla (m) 見せびらかし Faire du *fla-fla*. En voilà des *fla-flas* !
fric-frac [frik-frak] (m) (古い) 押し込み強盗
ngangan (形容詞) ぐちっばい, 軟弱な; [物語など] お涙ちょうだいの.
(名詞) ぐちっばい人, 軟弱な人.
- méli-mélo (m) まぜこぜ²².
pêle-mêle (m) ごちゃまぜのもの. (副詞) ごちゃごちゃ(に), 乱雑に, 雑然と.
entasser des livres pêle-mêle 本を乱雑に積み上げる
Dans cette maison, tout est pêle-mêle.
Jeter, semer des objets pêle-mêle.
- ric-rac [rik-rak] (副詞句) きっちり, ぴったり; ぎりぎり.
payer ric-rac sa note d'hotel ホテルの勘定をきっちり払う
- tohu-bohu [toyboy] (m) (天地創造以前の) 混沌, 大騒動, 大混乱; 喧騒²³.

(反復形を用いないもの)

- bataclan (m) 雑多なもの, ごたごた. et tout le bataclan その他もろもろ.
chochette (f) (俗語) 淑女ぶった[気取った]女, かまとと (間投詞的に用いる).
(形容詞) きざな, 気取った.
- nanan (m) (話語) 砂糖菓子, 甘いもの.
C'est du nanan. それはとてもすてきだ[おいしい, たやすい].

²⁰ chou (キャベツ, かわいい人) から形成された(GR). chouette (素敵) などにも共通の音の感覚があるかもしれない。

²¹ crasseux (垢だらけの) から形成された(GR). crade (非常に汚い) などもあり, cra-に不潔のイメージがあるらしい。

²² pêle-mêle とともに, 動詞 mêler (混ぜる) から形成されている。

²³ ヘブライ語が起源。

perlimpinpin [per-*lẽ*-pẽ-pẽ] (m) いかさま, いんちき. 絵空事.
poudre de perlimpinpin いんちき薬.

これでもやはり, フランス語の擬態語は日本語とは比べものにならないくらい少ない. しかしどうだろうか. 井上ひさし(大野晋ほか, 1990, pp.217-218)は言う.

問題は擬態語です。「日本語には圧倒的にこの擬態語が多い」というのが定説になっていますが, 筆者は(不遜にも)この定説を半分ぐらい疑っています. たとえば英語, なんらかの激しい動きを含む動詞がみんなみごとに-ash という音を持っているのはなぜでしょう。(clash, crash, dash, flash...). また, sli-ではじまる言葉が, 意味になめらかさを隠しているのはなぜでしょう。(slide, slip, slick, slime, slither...). ほかに, gl-(連続的な光. glance, glare, glaze...), str-(細長い形. straight, street, stream...)など, たくさんあります. -ash, sli-, gl-, str-..., みんな, 音によってある意味を象徴的に表そうとしたのではないのでしょうか. とすると英語にも擬態語が多いのではないか. 日本語の擬態語は, 二拍の語根を重ねるものが多く(こそこそ, ぴかぴか, きらきら), 形態的にはっきりしているから目につきやすい. しかし, たとえば英語では, それが形態的に顕著ではない. そこでなかなか気づきにくい。「びっくりした」のビックリは擬態語です. けれども大部分の日本人は, これを擬態語と意識していない. これと似た事情が外国語にもあって, 擬態語であることが隠れてしまっているのではないか.

井上の発言は英語についてのものだが, 同様の観点から, 泉(2004, p.85)もフランス語について述べている.

動詞では, ふらつく, きらめく, ぎらつく, はためくなどがオノマトペを元にして派生されたものだが, もう元が分からないまでになっているものもある. ささやく, とどろく, ひかる(ぴかぴかと関係あり), おどろく, ゆれる, などだ. しかし, こうした動詞までをオノマトペとはふつつ考えない. 音象徴(sound symbolism)という類のものに入るか, あるいは, もはやふつつの語と考えられているのである.

もし, こうしたところまで範囲を広げるなら, フランス語にも擬声語はもちろん, 擬態語はたくさんあることになる. chuchoter「ささやく」, grincer「きしむ」, rouler「転がる」, briller「輝く」, étinceler「きらめく」など, みなそうである.

この観点に立って擬態語の定義を拡大すれば, 次のような動詞や形容詞(名詞)も擬態語のリストに入れられるかもしれない²⁴.

²⁴ これらの例は直感的なものであり, 厳密な検証はしていない. 横に並べた形容詞や名詞は, 動詞と同語源だと思われるもので, 音象徴の証明にはならない. むしろ語源的に無関係だと思われる語同士に, 同じ音と意味の対応が見られるものが重要である. その可能性のあるものを縦にいくつか並べたものもある. grener と granuler など.

また, 語頭の音だけが問題になるとは限らない. 接頭辞などは外して考えた方がいい場合がある. éblouir や éclairer などの é.

éblouir 目をくらませる — éblouissant (形)まぶしい
 cf. blanc (名・形)白(い), blond (名・形)金髪(の)
 lisser なめらかにする — lisse (形)なめらかな
 glisser 滑る — glissant (形)滑りやすい
 graisser 油を塗る — graisse (名)脂肪, gras (形)脂っぼい
 grossir 太る — gros (形)太った, grossier (形)粗雑な
 grener, greneler ざらざらにする, grené (形)ざらざらの
 granuler 顆粒状にする — granuleux (形)つぶつぶの, ざらざらの
 éclairer 明るくする, clarifier はっきりさせる — clair (形)明るい
 cligner 目くばせ・まばたきする — clin (d'oeil) (名)目くばせ・まばたき, clinquant (形)金
 ぴかの
 planer 平らにする — plan, plat (形)平らな
 plier 折る, 折りたたむ, plisser ひだをつける — pli (名)折り目, ひだ
 polir 磨く — poli (形)光沢のある
 scruter 探る, 詮索する — scrupuleux (形)細心綿密な
 sculpter 彫る, 彫刻する — sculptural (形)彫刻の, sculpture (名)彫刻
 écrire 書く — scriptural (形)書きものの
 friser カールする
 friper 皺くちやにする
 froisser 皺くちやにする
 froncer 皺を寄せる
 frissonner 震える — froid (形)寒い, frais (形)ひんやりした

4.3.擬情語

擬態語のうち、「人間の心の状態を表すようなもの」(金田一, 同上, p.8)を擬情語ということがある。日本語の「擬情語では, イソイソ, ソワソワ, イライラ, ヤキモキなど落ち着かない心理を表すものに集中している」(金田一, 同上, p.19)と言うが, 反復形でないものには「のんびり, ゆったり, ほっと, ほっこり」など, 落ち着いた心理を表すものも少なくない(Ishino, 2006, p.115).

フランス語ではどうだろうか。上述の Enckelle & Rézeau(同上)は, 音が抽象化された表現の中に, 次のものを挙げている。

痛み(douleur) → aïe, hou, ouille.

攻撃性(agressivité) → grr, kss kss

無関心(indifférence) → brr, ffi, fit, pcht, pff, pft, prrt.

これらのいくつかは, すでに「擬声語」として辞書から採録して挙げておいたが, その説明には, つぎのように心理・感情の意味の記述が見られるものがある(主に『プチ』).

aïe	《繰り返して》ちえっ, いやはや, やれやれ
ouïe, ouille	うっ, いてて; うへえ, うひゃあ(痛み・驚き・不満)
hé	《驚き》おや, まあ, 《強調》Hé! Hé! ええ, おやおや(賛同・皮肉・あざけり・ためらい)
peuh	ふん, へっ, ふうん, へえ(軽蔑・無関心など)
ta, ta, ta	へえ, ふうん, もういいよ(疑惑・不信・いらだち)
taratata	うん, へえ(疑惑・不信・軽蔑)
turlututu	[tyr-ly-ty-ty] ふん, よせやい, ばかな(軽蔑・不信・拒否など)
youp	[jup] よっ, うっ(歓喜・活気・いらだち)

Enckelle & Rézeau にも次のような解説が見られる。

grr	人の苛立ちや攻撃性を示す。 Ah! celui-là! <i>grrr!</i> (p.246)
kss kss	人を別の人にけしかけるために用いる。= <i>acz acz, css css, ex ex, cz cz, kci kci, kis kis, ksi ksi, x x, xi xi, xie xie, zi zi</i> などのヴァリエーションがある。 Excite-moi donc encore! <i>ksss! ksss!</i> (p.272)
brrr	無関心, 拒否, 軽蔑を示すために用いる。 sa fille gonfla ses joues en tirant la langue et souffla : <i>Brrr!</i> (p.133) その他「恐怖」という記述も見られる(『プチ』)。
pcht	拒否, 無関心を示す。 Les règles du sport? <i>Pchitt...</i> ce n'était pas une barrière. (p.322)
pf	無関心, いい加減さ, 軽蔑, 倦怠感, 無力感の標識となる。= <i>pfou, pfeuh, pfhou, pfo, pfou, pfouh, pfu, pfuh, pfui</i> 。 Liliane fait un <i>pfhou</i> des deux joues, (...), de manière superfétatoire (...). (どうでもいいように). Le gendarme!... <i>pfiff!</i> ... dit dédaigneusement Fifi. (軽蔑するように). (p.324-325)
pf(t)	[pf(-t)], [pfyt] ふん, へっ(軽蔑・無関心)(『プチ』)。

これらの語は、「痛み」の語をはじめ、言語表現というよりも実際の発声音に近い印象を受けるものも多い。そのため、綴り方にヴァリエーションが多い。用例を見ても引用形式が多く、感情とともに発する声を書写した間投詞の性格が強い。音を移しただけなら、擬声語との区別が明確ではない。日本語の擬情語とは使い方がだいぶ異なっている。

しかし、音と意味の間に明確な必然性が見られず、一見、音を表すように見える語が、人間の感情を意味するという点で、擬情語の性質をもっている。最後の例の« faire un pfhou »のように言語表現らしい形式も見られるものもある。

また、次の例は、オノマトペらしい表現形式をもち、文の中に組み込まれているという点で、日本語の擬情語により近いと言える。

tralala 既に擬態語でみたように、『プチ』は「不信・喜びを表す擬音語(間投詞)」としている。

(cf. § 4.2.) 「派手・華美」のもつよい面と悪い面「楽しさ」「気取り」「嘘っぽさ」を考えると、そこから「喜び」「不信」の心理が生じると考えられる。その意味で、次の例も、擬態語(外面)と擬情語(内面)の両面の意味を持つと言える。

se marier en grand *tralala* 盛大に(嬉々として)式を挙げる
et tout le *tralala* その他もろもろの(関心が湧かない)もの
un dîner assez *tralala*, où il y avait un ou deux ministres, un peintre, un milliardaire, une altesse et des femmes à la mode (GR)
大臣, 画家, 軍人, 王族, 今風の女性達のいた, かなり派手な(俗物的な, 立派な)夕食

flagada = fragada とも。「力がない, 疲れた」「悲しい」という心理状態を表す。

Se sentir *flagada*, complètement *flagada*.

数の一致がある。

Je suis complètement *flagada*. Ils sont complètement *flagadas*.

« des airs *flagada* » と一致しないこともある。

flasque(たるんだ, 無気力な)と語源的な関係がある。

fragada の綴りは, fragile との類推か²⁵。

これらが擬情語とすれば, フランス語にも予想以上に多いと言えるかもしれない。また, 外見の様子を表す擬態語があれば, それが内面の心理状態を描写をする擬情語となることはあり得ないことではない。擬態語(§ 4.2.)のように, 観点を変えると増える可能性はある。今後の研究の課題になるだろう。

5. まとめ

本論では, フランス語の語彙の特徴を知るため, いくつかの点を考察した。

まず我々は, フランス語の語彙が何語あるのかを論じた。辞書の項目数をもとに判断すると, フランス語の語彙数は英語や日本語に比べて少ない。その理由として, 新造語よりも既成の語を組み合わせて命名することが多く, 語彙が増えにくいというメカニズムがある。また一語に複数の意味を持つ多義語が多いことも重要である。その結果, 少ない語彙でテキストをカバーする確率が高いことを, 統計データなどをもとに裏づけた。

次に問題にしたのは, どのような分野の語彙が多いかということである。日本語と比較をしながら, これまでにも指摘されている, 動物に関する語彙, 身体語彙, 料理に関する語彙, 天体に関する語彙などを精査し, リストアップした。これは過去の指摘を再認することになったが, 同時に, 語彙が多い分野は, その文化が高い関心を持っていることもあるが, 体系的でない命名によって, その分野に関する分析を停止してしまう可能性もあることを指摘した。

最後に, 日本語の語彙の特質として知られているオノマトペが, フランス語でどのように分布しているか考察した。特に, 日本語に多く, フランス語にはほとんどないと言われる擬態語につ

²⁵ この語に関する解説は主に GR による。fragada の綴りは France Dohrne さんからのご教示による。ネット上に一例見られた。fragile との類推については著者の個人的意見。

いて、その例を集め、フランス語には動詞形のオノマトペが多いこと、さらに擬情語とみられるものも可能性があることを指摘した。

フランス語の語彙についてはまださまざまな検討すべき問題がある。それらについてはまた機会をあらためて考察したい。

【文献】

Delas, D. & D. Delas-Demon. *Dictionnaire des idées par les mots*. (Paris : Le Robert, 1979)

Enckelle, P. & P. Rézeau. *Dictionnaire des onomatopées*. (Paris : PUF, 2003)

Hamon, A. *Les mots du français*. (Paris : Hachette, 1992)

Ishino, K. « Sur les expressions onomatopéiques de l'émotion en japonais. » *Cognition et émotion dans le langage*(慶應大学 COE プロジェクト・シンポジウム「心と感情の言語表現」報告書) 慶應出版 (Tokyo : Keio University, 2006), pp.105-115.

Le Fur, D. (dir.) *Dictionnaire des combinaisons de mot*. (Paris : Le Robert, 2007)

Mitterand, H. *Les mots français*. (Paris : P.U.F., 1963, 2000 (10^e éd.)).

=ミッテラン『フランス語の語彙』(白水社, 1984)

Sommant, M. *Dictionnaire des mots et des idées*, (aris : Pocket, 2003)

浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』(角川書店, 1978年)

石野好一『フランス語を知る、ことばを考える』(朝日出版社, 2007年)

———「フランス語を知る、ことばを考える(公開講座「ことばの世界・世界のことば)」」『ことばの世界』(愛知県立大学高等言語教育研究所年報) 第2号, 2010年3月, pp.117-132.

泉邦寿 「続フランス語そぞろ歩き3」『ふらんす』1975年6月

——— 「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現(日本語講座4)』(鈴木孝夫編, 筑摩書房, 1976年) pp. 105-151.

——— 『フランス語を考える20章—意味の世界』(白水社, 1978年)

——— 『フラン語の小径—楽しい意味世界への誘い』(白水社, 2004年)

大野晋 『日本語の水脈—日本語の年輪(第2部)』(新潮社, 2002年)

———他『日本語相談一』(朝日新聞社, 1989年)

———他『日本語相談三』(朝日新聞社, 1990年)

沖森卓也ほか『図解日本語』(三省堂, 2006年)

金川欣二『脳がほぐれる言語学—発想の極意』(筑摩書房, 2007年)

北原保雄「日本語の特質」『言語』1982年7月. pp.38-45.

金田一春彦『日本語』(岩波書店, 1957年)

———『ことばの歳時記』(新潮社, 1966年/1973年)

———「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』(浅野編, 1978年) pp. 3-25.

———『日本語 新版』(上)(岩波書店, 1988年)

———『ホンモノの日本語を話していますか?』(角川書店, 2001年)

クリスタル, D.『言語学百科事典』(大修館書店, 1992年)

小林英夫「擬音語と擬容語」(1965年)『小林英夫著作集5』(みすず書房, 1976年),

pp.318-340.

- 佐久間治『英語の不思議再発見』(筑摩書房, 1996)
- 島岡茂『教養としての言語学』(白水社, 1982年)
- 田島宏「ことばのイメージ(2)擬音語・擬態語」『NHK ラジオフランス語入門』1973年5月, p.79
- 田辺保『フランス語のこころ』(至誠堂, 1969年)(→新版1997年)
- 『フランス語はどんな言葉か』(講談社, 1997年)
- 西江雅之『「ことば」の課外授業—“ハダシの学者”の言語学1週間』(洋泉社, 2003年)
- 『新「ことば」の課外授業』(白水社, 2012年)
- 蛇蔵&海野風子『日本人の知らない日本語3』(メディアファクトリー, 2012年)
- 松原秀一『ことばの背景』(白水社, 1974年)(→新版1996年)
- 『フランスことば事典』(講談社, 1996年)
- 宮島達夫他編『図説日本語—グラフで見ることばの姿(角川小辞典)』(角川書店, 1982年)
- 森本英夫・舟杉真一『フランス文化を理解するための語彙集』(駿河台出版社, 2009年)

(フランス語頻度辞典)

- Gougenheim, G. *Dictionnaire fondamental*. (Paris : Didier, 1958)
- , P. Rivenc, R. Michéa & A. Sauvageot. *L'élaboration du français élémentaire*. (Paris : Didier, 1964)
- Matoré, G. *Dictionnaire du Vocabulaire essentiel*. (Paris : Larousse, 1963)
- Lonsdale, D. & Y. Le Bras. *A Frequency dictionary of French Core Vocabulary for Learners*. (New York : Routledge, 2009)

(フランス語辞典)

- Dictionnaire Anglais-Français Larousse*. (Larousse, 2009, 2013. iPad application)
- Le Grand Robert : dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*. (Paris : Le Robert, 2005)
- 『クラウン仏和辞典』(三省堂, 2005)
- 『プチ・ロワイヤル仏和・和仏辞典』(旺文社, 2003)
- 『ロワイヤル仏和中辞典』(旺文社, 2005)